

研修旅行

学園精神の源を求めて一創立者生い立ちの地を訪う旅

趣旨： 鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター設立10周年を記念して、学園創立者シスター江角ヤスの生い立ちの地を訪ずれ、シスター江角の人となりを知り学園精神の理解を深めるよすがとすることがこの研修旅行の目的です。この地はまた、長崎に純心学園が創立された頃からよき理解者として協力された恩人永井隆博士の郷里です。

シスター江角と永井博士ゆかりの処々を、鹿児島純心女子学園の中高、短大、大学の現在、或いはかつての教職員や関係者がともに旅することで、純心ファミリーの成員として相互の親しみと絆を深めることも大変意義深いことでしょう。

実施の時期について

この研修旅行は平成22年度の終り、平成23年3月19日～21日に企画されていたものですが、直前の3月11日に発生した東日本大震災によってあまりにも多くの犠牲者と大きな被害が出ましたので、悲しみの折から、せめてもの慎みとして9月に延期したものです。結果的には当初よりも広い範囲からより多くの方に参加していただけることになりましたが、被災地では6か月を経た今もまだ大きな苦しみが続いていることが日々の報道で伝えられています。この研修旅行は祈る機会も多い旅ですので、各自の意向、学園のための祈りに合わせて被災者や被災地のためにも祈りながらたどる道行きとしたいと願っています。

対 象： 鹿児島純心女子学園 現、前教職員及び家族
日 程： 平成23年9月17日(土)～19日(月)
主 催： 鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター
旅 程： 次頁参照
旅行会社： 島根県出雲市 トラベル クリエイト(南州バス使用)

1.行程

鹿児島純心女子大学 様

日程 平成23年 9月17日(土)～9月19日(月)

方面 出雲・松江市

トラベルクリエイト

島根県知事登録 3-37号
総合旅行業取扱管理者 森山 昌幸
〒693-0001
島根県出雲市今市町396-1
TEL:0853-22-3045 FAX:0853-22-9715
E-mail info@travel-create.com

担当者 岩崎

日付	行 程						備考
9月17日(土)	鹿児島純心女子大学 5:20	J R鹿児島中央駅西口 6:00	休憩・朝食 (サービシアラ)	山口ザピエル聖堂 朝食 11:30 13:30	津和野(教会・資料館) 14:30 15:30	夕食 (浜田ゆうひばーく) 17:30 18:30	ホテル チェックイン(出雲) 21:00
9月18日(日)	ホテル チェックアウト 8:30発	出雲高校・平田植物園 8:40	出雲教会ミサ 9:30 10:30	江角ヤス生誕の家 11:00 11:50	屋敷 12:50 13:20	如己堂(三刀屋永井隆記念館・生い立ちの家) 15:20	
	天満屋 15:30 16:20	永井隆生誕の地 16:50 17:20	ホテルチェックイン (松江) 17:40	共通湖の夕日 18:10		夕食 18:50	
9月19日(月)	ホテル チェックアウト 8:30	足立美術館 9:00 10:20	夕食 12:30 13:30	休憩 (SA)		J R鹿児島中央駅西口 22:30	
				鹿児島純心女子大学 23:30			

適用 バス・タクシー

作成日 2011年3月11日

<宿泊先>

日にち	ホテル名	電話	住所
1日目 9月17日(土)	出雲グリーンホテルモリス(泊)	0853-24-7700	693-0008 島根県出雲市駅南町2-3-4
2日目 9月18日(日)	松江ニューアーバンホテル(泊)	0852-23-0003	690-0845 島根県松江市西条町40-1

1. 江角ヤス先生略歴

- 1899年 (明治32) 島根県簸川郡久木村にて生まれる
- 1911年 久木村尋常小学校卒業
- 1914年 簸川郡直江村外五ヶ村組合立直江高等小学校卒業
- 1916年 簸川郡今市町(現出雲市)島根女子師範二部卒業
- 1920年 東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)卒業
- 1923年 東北帝国大学(現東北大学)理学部数学教室入学
- 1924年 仙台市豊屋丁教会にて受洗。洗礼名マリア
- 1926年 東北帝国大学(現東北大学)理学部数学教室卒業
- 1926年 京都府立第一高等女学校(現鴨浜高校)数学科教諭となる
- 1929年 雙葉高等女学校の数学教諭となる
- 1930年 マルムチエ聖心会修練院で新修道会設立準備のため渡仏(1934年帰国)
- 1934年 長崎純心聖母会会長に就任(1973.9退任)
- 1935年 純心女学院創設(翌年長崎純心高等女学校と改名)学校長就任
- 1940年 学校法人鹿児島純心女子学園理事長就任
- 1962年 学校法人川内純心女子学園理事長就任
- 1964年 学校法人東京純心女子学園理事長就任
- 1967年 社会福祉法人純心聖母会設立。理事長就任
- 1974年 学校法人純心女子学園理事長就任
- 1980年 恵の丘長崎原爆ホーム別館にて帰天



シスター マリア・マダレナ 江 角 ヤ ス
(1899～1980)

旅のこと

浅黄色の若い稲穂がどこまでも波打っているような広々とした田圃の向こうに白黒のコントラストが美しい三角屋根の潇洒な洋館と、長年お住まいとしてこられたのもあろう従来型の和風平屋建てが並び、際立って高い築地松の防風林を背に良く刈り込まれた木々に囲まれたお庭が落ち着いた佇まいをみせている。「ああ、この家」一人一人車を離れながらふと口をついて出てくることばであった。何の標識も看板もあるわけではない。でも、この家を訪れたくて私達は1年以上も前から2泊3日の旅を準備してきたのだ。「学園精神の源をもとめて一創立者生い立ちの地を訪う旅」という少々長い研修旅行の名前には色々な思いがこもっている。



鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センターの設立10周年の記念に、かねてから要望されていた第3回の「信仰のふるさとをたずねて」という殉教者ゆかりの地への研修旅行を考えたが、話し合ううち、この度はシスター江角の生誕の地へ、ということになった。創立当初の純心学園と原爆被爆後の復興の物語には、中心にあるシスター江角ヤスの左右に片岡弥吉先生(長崎純心大学片岡千鶴子学長のご父君)と安達篤先生(元鹿児島純心女子高校安達強教頭のご父君)、そして背後に永井隆博士のお姿がある。永井隆博士は、はしなくもシスター江角と同じ島根県出身で、その故郷は旅の行程としてはそれほど離れていない。お二人とも生まれながらの信仰者ではなく、成人した高学歴者として一人は仙台、一人は長崎でのカトリック入信であった。しかし長崎では永井先生のお住まいは純心学園のご近所と言えるところにあっし、原爆で亡くなられた緑夫人は純心高女で家庭科の教鞭をとられており、一人娘の故茅野さんは卒業生である。お二人のゆかりの地を訪れて大自然と土地柄とに触れ、神さまのみ摂理に導かれて長崎で出会い、純心学園を生み育てて下さった二人の教育者のお姿とお心に思いを馳せたい、そうして今私達の手に委ねられている純心教育の課題に取り組む力を頂くことができれば、との願いがあった。

当初予定していた日程の直前に、あの東日本大震災がおこり、あまりの被害の大きさに声もない思いであった。この時期には、ということでキャンセルの申し出も半数を超えたが、幸い参加予定者と旅行会社の理解を得て半年間の延期とし、9月17日(土)から19日(月)の日程で実施した。この間に短大や高等学校関係者の中から新しい参加

当初予定していた日程の直前に、あの東日本大震災がおこり、あまりの被害の大きさに声もない思いであった。この時期には、ということでキャンセルの申し出も半数を超えたが、幸い参加予定者と旅行会社の理解を得て半年間の延期とし、9月17日(土)から19日(月)の日程で実施した。この間に短大や高等学校関係者の中から新しい参加

者も加わり、本当に全学園的な新旧教職員28名からなるグループを組むことができた。全行程を貸し切りバス1台で、大学発着で言えば、第1日目は午前5時20分発、3日目は午後11時30分帰着(実際はもう少し遅くなった)というハードスケジュールであったが不具合になる方もなく元気に旅を終えた。山口のザビエル記念聖堂を経て津和野



に寄り、乙女峠巡礼は無理であったがカトリック教会訪問の後、文化の香り高い町を少し歩き、出雲へ。中心の第2日目には広島教区の肥塚神父様が車に同乗して下さり永井博士を中心とする印象深いお話をしてくださった。島根女子師範学校生徒としてシスター江角が平田駒太郎先生に博物学と植物の育成を学び、生涯植物園造りの夢を持ち続けるほどの影響を受けた現出雲高校の平田植物園では、日曜出勤して下さった丸山先生に熱心なご案内をいただいた。雲南市の永井記念館では名原館長様、松江市の永井博士生誕の家(田野医院)では田野博子様にご説明をいただき、他の部分は、東京純心大学がこの方面に平和教育の旅をした折にツアーガイドをつとめられ、今回の旅も細心の心遣いで組み立てて下さったトラベルクリエイトの岩崎さんが要領よく案内と解説をしてくださった。お食事等の配慮も行き届いていて、一同感謝したことだった。3日目には帰路とは逆方向になるが安来の足立美術館まで足をのばし、時間不足を嘆きながらも名声に恥じない内容の高さに触れることができた。後は一路鹿児島島に向かってひた走る車の旅であったが、ただ一人で全行程を運転され、素晴らしい運転技術と乗客への配慮で全員に気持ち良い旅をさせて下さった南州交通の岡田運転手に特にお礼を申し上げたい。また、キリスト教文化研究センター企画としての性格上必要となる準備や実施のプロセスでそれぞれの役割をはたされた所員の先生がたにも感謝したい。短い旅ではあっても、一つのグループ旅行を組織し完了するにはどれほど多くの方々の協力があり、その協力をまとめてゆく努力があるのかを深く感じさせられたことであった。

終了後に旅行会社から依頼されたアンケートに協力したが、色々な所を訪れたにも関わらず、「この旅で最も印象深かったところは？」との問いへの答えは圧倒的に「シスター江角生誕の家」が多かった。家を所有されている江角朋絵様は関東におられるので、この家には現在どなたも住んではおられない。私達は岩崎さんから、大丈夫ですよ、と言われて勝手に庭先に入りこみ、外から家のあちこちを眺めては写真などを撮らせていただいたのである。この地方の特色といわれる縁の下に欄間様のものがはめ込まれている所や、作りの古そうな部分を見ては明治、大正期、江角ヤスの出生(1899

明治32) 生い立ちの頃の佇まいを想像するのみである。日本の木造民家で百十年余にわたり改築されず原形を保つ例は非常に少ないので、私達の目の前のお家が昔のままという訳にはいかないであろう。当時のものといわれる永井隆「生い立ちの家」や野田医院の「出生の間」と比べても違いは大きい。内部は勿論わからないし、どなたにお会い



したわけでもない。しかし不思議なことに、この家が私達の心に残したものは人それぞれに違いながらも他を圧して大きいのである。

区画整理のために道路は勿論川の流れも変えられる事があるから、正確な「往時」の様子は郷土史家に何うしかないのである。遠く北山を眺め、斐伊川の澄んだ流れのある広々とした農村で村長や校長を勤められる父上のもと、9人兄弟の6番目としてのびのびと育たれたのであろう。母上も大変賢い立派な方であったという。(山田幸子著

「江角ヤス」 シリーズ福祉に生きる55参照) この美しい田圃の広がりの中を元祿袖の普段着で兄弟や近所の子どもたちと遊んだり、肩からかばんをかけて学校に通ったりする元気な小学生を想像することは難しくない。母上とともに写っている小学校3年時の写真で見ると利発で勝気な子という感じがする。礼儀正しく、よくお手伝いもできる「ヤスさん」は近所でも褒め者であったという。「私が良い成績をとると皆が喜んでくれるから、それが嬉しくて一生懸命勉強しました」と言われた事があったのを思い出す。大家族であっても教育に熱心で温かい家庭であったことは、後に家庭の経済が不如意となり、ヤスが進路変更を考えた時に資産家に養子縁組しておられた次兄が学資援助を承諾されて東北帝大への進学が可能になったという事情からも察しられる。(「江角ヤス学園長先生追慕の記」224頁 安達篤『聖女マダレナの御加護を願って』参照)卒業したら「日本で5本の指に入る女性」になる筈であったから、その時にこそ親孝行も兄上への恩返しもできるものと、ふるいたっておられた事だろう。それなのに東北帝大在学2年目に父上は急逝された。お好きなお酒を自分で買って飲ませてあげたかった、という悔いをシスター江角は後あとも口に残されている。人から聞いた話をあわせると、シスター江角はお酒の好きな方には思いがけないサービスをされる事があったらしい。情の深い方であったから、この父上への思いがあつてのことだろうか。斐川平野の自然を背景にシスター江角を思い出すと何故かぴたり合って、この土地にしてこの人あり、と納得してしまう。どのようにと問われても答えられはしないけれども。

ツアーガイドの岩崎さんのお話によれば、このあたりは浄土真宗の信仰の深い土地

柄であるという。裏日本の農村には多いことのようにあるが、真宗の信仰は地域の人々をまとめると同時にその道からそれる者、同じ信仰を共有しない者を際立たせる事にもなりやすい。それに都会の淋しさとは対照的な古い村独特の込み入った心理というものもあるらしい。田舎の村と聞いていたので田圃の中にある集落を想像して、30人



ものグループがバスを乗りつけてがやがやと降りて行けば、近所迷惑になるだろうと旅に出る前には心配していた。しかし実際には家の建て方はまばらで、それぞれが一軒屋と言った構えであったから、田圃の中に止まっているバスを見て「何事ですか」と警察官の方が来られたとは運転手さんから聞いたけれども、近所の方が顔を出されることはなかった。しかしこのまばらには意味があって、一つには大きな声を出しても隣に聞かれることがない、ということ、つまり干渉されない自由。しかし他方では、適当な距離を利用してどこに誰が来たか、誰が出入りしているかを見る事もできるのだという。皆が皆を知っている古い部落社会では、話は聞かなくても人の出入りを見ていれば人間関係の想像はつく、という訳である。こうなると良くも悪くも不干渉の自由とは程遠い。今でもそうであれば、大正末期から昭和の初めにかけては推して知るべし、である。

シスター江角は、東京女子高等師範学校を大正9年(1920)に卒業し、東北大学に入られる前に鹿児島市の私立鶴嶺高等女学校に1年、東京の青山高等女学院に1年勤務されている。東北大学を卒業されても故郷に錦を飾ることなく、生涯島根に帰られることはなかった。私はこのことを修道会の会長としての務めと純心学園の創立や再建に忙殺されての事とぼんやり考えていた。シスター江角御自身が島根の話をなさったというのも聞いたことがなかった。しかし、亡くなられた後、故郷の斐川町で斐川町人物史の一冊として『「江角ヤス」物語』が出され、本年2012年2月には出雲市、斐川町合併記念の「第19回故郷歴史文化発見事業」として、『純心教育と福祉事業に一生を捧げた「江角ヤス」～マリアさま いやなことは私によるこんで～』という展示会が行われ700人の入場者を集めたという。永井隆は故郷に数多くの書信を送っており帰郷することもあって資料は多いが、シスター江角は地元と接触がなかったので、知られてもいなかったし資料もない、ということで長崎純心大学から借りて展示をしている。そういう時に理由づけに使われているのが、「キリスト教に入信したこともあって故郷には帰らなかった」ということである。キリスト教入信という点では永井隆とて同じであろうが、こちらは男性であり大学教授の地位もあった。シスター江角は修道

服を着る身分である。浄土真宗の信仰深い信徒であり長く村の顔役でもあった江角家で、当時の村では夢物語のような高等教育を受けさせた注目の娘がキリスト教の尼僧になったということであれば、すんなりと村に帰ることも難しかったのかもしれない。けれどもあの美しい裏日本の自然とその土地に根ざした家族の絆と伝統を、心の中でシスター江角はどれほど懐かしく思っておられたことだろうか。勿論長崎にご親族が訪問されることはあったろうし、身近に甥御様の安達先生とそのご家族、姪御様のシスター新谷やその御兄弟もおられたけれども、私たちが見たあの山並みや田圃や防風林のあるお里に一度でも帰して差し上げたかったと思う。

「ほうら、よかった、よかった。行ってきたの？ 私の故郷はいいところでしょう？」と天国で微笑んで下さっていることとは思うけれども。

シスター江角、行って参りました。有難うございました。

荒井 聡子記